日本外交協会報
The Society for Promotion of Japanese Diplomacy
発行:(一社)日本外交協会　URL http://www.spjd.or.jp
平成28年 8月31日号

「ISIL(イスラム国)の脅威にどう立ち向かうか」

外務省　中東アフリカ局 局長　上村　司　氏

（平成 28 年 7 月 29 日　於日本記者クラブ）

20 世紀の中東担当はパレスチナ問題で大騒ぎ

私は外務省に入省してアラビア語を勉強し、中東に関わって 36 年目になりますが、20 世紀の中東と 21 世紀の今、我々が目にしている中東とは全く違うというのが実感です。1980 年前後はパレスチナ問題が中東の最大の問題でした。アラファト議長とかＰＬＯ（パレスチナ解放機構）とかの名前を覚えていらっしゃる方も多いと思います。しかし、現代ではかつての国対国の非常に分かりやすい構造から国の枠が外れ、種々の要素が絡み合って、この地域に問題を起こし、それが震源地となって世界的な問題になっています。これが 20 世紀と 21 世紀の大きな違いなのだろうと思います。

「ＩＳＩＬの脅威にどう立ち向かうのか」という本題に入る前に最近の中東情勢をおさらいします。

毎日 50 人、100 人と暴力で人が亡くなっているのは中東・北アフリカ地域だけです。地図を見ても、シリアとイラクの一部、リビア内戦、イエメン内戦で火が燃え盛っている。パレスチナのガザで、２年前の夏には 2000 人を超す犠牲者を出したガザ紛争が起きている、というのが大きな俯瞰図です。

20 世紀の中東はそれぞれの国がしっかりガバナンスしていた時代でした。それから 25 年、30 年しか経っていないのに、地域にこんなに多くの火が広まった。なぜなのか、それぞれの根っこはどこにあるのか、という問いと答えの中にＩＳＩＬ問題を解く鍵があると思います。「イラクでシーア派、スンニ派が対立し、クルド人は文句を言う。だったら国を三つに分ければいい」と三分割論を言う識者がいますが、中東の実態をご存じない。中東は境界で分けられるほど、くっきりと民族や宗派が区別されていないのです。

中東の多民族混在には長い歴史がある

私は 1982 年からシリアのダマスカスで下宿をしてアラビア語の勉強をしました。ボロ車を借りて奥地も回りました。レバノン山脈に分け入ると、村は低地ではなく、尾根道に沿って２㌔おきくらいに点々とあります。女性も真っ黒な布で顔を隠して目だけ出しているドルーズの村があり、２㌔くらい行くと、今度は花柄のワンピースを着た目の青い、肌の白い女性のいる村。彼らはコーカサス出身です。レバノン山脈を歩くと、村々によって全く違う民族・宗派・宗教の人が住んでいる。そういう状況を目の当たりにして、ここを治めるのは大変だなと実感しました。

中東は今から千年前の 1080 年代には十字軍がヨーロッパから大挙してここを攻め、約 300 年間、シリアのアレッポ近郊までキリスト教国を作っていました。今は十字軍国家は全く跡形もないのですが、その時に残された人たちの子孫がいることも事実。これもモザイクの原因の一つです。二千年の単位で振り返ると、ペルシャ帝国がこの地域を支配し、ギリシャ・ローマと対峙する時代もあり、エジプトもクレオパトラの時代にはこの地域を席巻しました。この地域は主要勢力が支配したかと思えば縮まる鼓動のような歴史をたどってきた地域です。

では、なぜ 20 世紀はパレスチナ問題を除いてそこが落ち着いていたのか。それは「国民国家」の枠をかなり強い権力で統治することが 20 世紀のこの地域のルールだったからです。

「アラブの春」で強権のタガが外れ・・・

1990 年の第１次湾岸戦争あたりから、この地域に民主化の波が押し寄せました。衛星放送やＩＴの発